

森島中良の見た海彼の文化

——『紅毛雑話』『万国新話』を中心に——

岡 田 袈裟 男

一 中良と海彼への関心

近世中期、森島中良が見、浴びた海彼からの波がなにもものであったか。いくつかの海外に向けた眼から生まれた著述からその一端を探る。中良は宝暦六年に生まれたと目され、以降明和、安永を経て天明に至る期間（一七五一―一七八九）、この典型的な江戸戯作の時代を生き、文化七年に没した。十代の時、平賀源内を助け手に染めた浄瑠璃本を皮切りに、多くの字、戯号のもとに狂歌、狂文、黄表紙、洒落本、読本へと戯作世界を生き、また學術方面で和漢洋にわたる言語との出会いをはじめ、対訳辞書の編纂、世界の事物紹介、考証などに健筆をふるった。中良の生きた時は戯作の時代であったが、またさまざまな意味で今日に似た総合的な文化の時代でもあった。桂川虞臣（中良の幼名）は築地二百五十坪の桂川邸で育まれた。幕府侍医法眼を世襲する名門桂川家が江戸における海彼の文化享受の中心地の一つであったことは重要な一点である。今日に継承された桂川の遺品は江戸時代、東

西の文化受容につながる具体的な物証群であることを以って銘すべきである。

二 中良の海外認知

中良の海外認知を記した代表作『紅毛雑話』では、はじめに「和蘭陀の開闢」を天明七年の今日まで一七八七年に及ぶと書き、つづいて「法蘭得斯^{フランドル}の正月」で「冬至より十二日にあたる日をもつて、彼国の正月とする」とした。西洋暦が一般に知らされたはじめの一つである。この七年後に大槻玄沢塾で開催された太陽暦の正月を「新元会」と呼び、中良も参加した。江戸ではじめて催された西洋風の正月は「芝蘭堂新元会図」（早大図書館蔵）に残され、参加者も多く明らかにされている。「寛政六年甲寅閏十一月十一日即西洋一千七百九十四年一月十日」と記されているが、天保八年（一八三七）まで四四回に及んだ。中良は西洋の習俗の紹介を正月の行事を伝えることで出発したのである。天明七年は一方で中良が戯作者としてもエポックを画した年で、洒落本『田舎芝居』

の「序」で戯作本質論を書いた。中良は理知の人であった。『紅毛雑話』はこの暮に出たが、ほとんどの日本人にとって未知であった世界を紹介する啓蒙的な書物である。異文化との出会いは將軍家侍医の桂川家に生まれたときに運命づけられたといつてよい。兄の四代目桂川甫周国瑞は『解体新書』の翻訳にかかわった。語学力のすぐれた俊才であったことが杉田玄白の『蘭学事始』に記されている。幕命を受けて大黒屋光太夫の漂流から帰還までの尋問記録『北槎聞略』をまとめた。兄国瑞は中良論のためににもっとも重要な人物である。中良が若い日に出会った源内はもとより、大槻玄沢をはじめ、多くの蘭学者との交流がまた日本人の海外認識の歴史を跡づける要素であり、生地築地における桂川のサロンは江戸西洋学のメッカであったといわなくてはならない。ここをこそ中良は西洋発見の第一義的な場所としたのである。

中良は『紅毛雑話』の後『万国新話』（寛政元年「一七八九」、『琉球談』（寛政二年「一七九〇」）をまとめ、更なる海彼への理解を広げた。こうした関心の語学的現われは『類聚紅毛語訳』（『蛮語箋』日蘭辞典、寛政一〇年「一七九八」、『魯西亞寄語』（『露日辞典』、文化七年「一八一〇」）、『俗語解』改編（中日辞典、未完、文化七年「一八一〇」）などの対訳辞書編纂に結晶化した。このほか『紅毛智恵洋・西洋奇効図彙・西洋奇談・地名便覧・朝鮮談』などが『西洋学家訳述目録』『本朝医家著述目録』、板本の広告等に載るが、残念なことにこれらの書物の実在を未だ知ることができない。とはいえ現存する種々の書物を通して中良が示した力量とその質、さまざまな試みの深さは確かに認められる。その場合「森島中良」とは豊富

な資料を駆使して海禁の時代の日本人としては希にみる異文化の了解者であったことがわかる。

本稿では中良の著述『紅毛雑話』『万国新話』を関連する玄沢著『蘭説弁惑』とともに検討し、さらに『琉球談』『海外異聞』『惜字帖』などにも及びたいと思う。

三 三書略解

つぎに『紅毛雑話』『万国新話』『蘭説弁惑』に簡略に触れ、次節で三書に採択されている項目内容を検討したい。

A 『紅毛雑話』天明七（一七八七）年刊

序は桂川甫周国瑞、大槻玄沢、また跋を宇田川玄随、前野良庵が添えている。『紅毛雑話』はよく知られた書物であり、研究史のうえでもさまざまな評価を受けている。それらは、あるいは西洋の「版画」法への興味、またライレッツセの『大絵画本』との影響関係の考察、あるいは北尾政美が描いた「野札幾的爾之図」に遊ぶ僧形の若き中良と源内の図への興味、さらには顕微鏡を使つて知ったミクロコスモスの実態評価等々にみられる。『紅毛雑話』がどれほどにオランダをフィルターとした西洋の文化をこの国に知らせたか、新鮮であり、好奇の眼を誘ったことはすでに明らかである。そうした中には不利な環境におかれた子供や、貧しい人々たちを収容する施設をはじめ、当時の日本とは異なる社会システムの見へと導いたのである。

また、中良の記す「凡例」は本書の成立に至る当時の環境をよく語っている。

此書は我伯氏桂川国瑞法眼。公の御許を蒙りて、春毎に参向する紅毛人の客舎にいたり薬品の鑑定、蜜書の不審ななど、訳を重て討論の暇、蜜人の語りたる雑話に珍らかなる事あれば、今日なんかかる奇談を聞たるなど、うちものかたるるを、唯に聞捨んもほるなければ、かりそめなるものに書つけ、又は彼国の書字べる人達の集へる日など、其所に侍りてうち聞たる事をも、筆の随にかきあつめたる雑録にして、もとよりおほやけにすべきものにあらず。しかるを此申椒堂の主のあなかちの需に應して、十が一を抄出し、紅毛雑話と標題して、梓に彫む事とはなりぬ。心を用ゐぬ書き捨の原書のままに写たれば、文に雅俗紛雜す。されども誌す所の説においては、いささかも虚妄なし

申椒堂は江戸須原屋市兵衛で江戸中期の書肆。中良は『琉球談』などの刊行をも乞われた。

B 有馬元晃口授大槻玄沢『蘭説弁惑』寛政十一（二七九）年刊。天明八年序、附言。

「天明戊申仲冬」の識語のある宇田川玄随の序、同じく「天明戊申仲冬朔旦」とする有馬文仲元晃の附言ならびに美久羅幽蘭斎の「蘭説弁惑のおくにするす」とし、「寛政十一年乙未三月」とする跋文がある。「美久羅幽蘭斎」の詳細はわからないが、奥書に「陸奥仙台侍医磐水大槻玄沢先生口授／門人 丹波福知山医官有馬文仲元晃筆記／伊勢洞津図南越村深藏子虚父校正／幽蘭斎藏板／寛政十一年乙未三月／製本所 勢州洞津東町 山形屋東助」とある。玄沢には他『蘭畹摘芳』『六物新志』などがある。

C 『万国新話』寛政元（二七八）年刊

宇田川玄随「寛政乙酉之冬」の序、前野良庵「寛政乙酉仲冬」の序、桂川甫周国瑞「寛政改元臘月初六 書於迎旭書屋閑窓」の序がある。ついで万象亭主人誌「寛政改元季秋端午」の例引がある。「造物主の天地を化生するや、地海を合して一つの団体となす。」と注目すべき書き出しの後、アジア、ヨーロッパ、アメリカ、アメリカの四世界があると記している。『紅毛雑話』に次ぐ著述だが、この書はアジアを対象としている。中良編『蜜語箋』付録の「万国地名箋」に収載される地名・国名の記述は『万国新話』と多く照応する。

四 三書の内容

A 『紅毛雑話』『蘭説弁惑』『万国新話』全項目の分類

凡例

1 記号「紅一」五 ↓ 『紅毛雑話』巻之一から巻之五、「弁上」「弁下」 ↓ 『蘭説弁惑』上・下巻、「万一」四 ↓ 『万国新話』

巻之一から巻之四

2 目次の項目と本文中タイトルとの違いがあるものについては本文中タイトルを【 】で囲った

3 書式例 涅槃の話【涅槃】万四 ↓ 目次項目が「涅槃」の語【本文中のタイトルが「涅槃」】（地名・国名が「セイロン」）「万国新話巻之四」に収録。なお、地名・国名が本文中「同上」とある場合（ ）で囲った。

参考 亜媽撒搦—アマゾン、亜刺皮亜—アラビア、応帝亜—インド、

真臘—カンボジア、暹羅—シヤム、瓜哇—ジャワ、蘇門答刺—スマトラ、錫蘭—セイロン、轆而輹—ダツタン、占城—チャンパ（ベトナム中南部）、得白得—チベット、納多理亜—ナタリア、巴旦—ハダン（インド近海の島）、巴爾齊亜—ペルシヤ、渤泥—ボルネオ、馬路古—モロッコ、莫臥爾—モンゴル、如德亜—ユダヤ、呂宋—ルソン

1 言語・技芸 支那の文字【唐土の文字】紅三、象人語を解る話

【象人語を解す 錫蘭】万四、同地の言語【言語（渤泥）】万四、和蘭陀の画法附銅板の法【紅毛の画法 附銅板の法】紅四

2 宗教 南無阿弥並仏の名 紅一、海上の神火 紅一、靈鷲山の

図説附釈迦如来の伝 紅二、釈迦の名附仏の金色【釈迦の名附仏の金色】紅三、阿羅々仙人並天竺の額 紅四、聖水の話【聖水（爪哇）】万三、涅槃釈迦の話【涅槃釈迦（錫蘭）】万四、龍の図説並喝臥国の風土記 紅一

3 人倫 参向の三名【参向のかびたん 書記役 外科】弁下、黒

坊 紅一、鼻帶 紅一、黒坊手拭 紅一、左右の手 紅一、黒坊廁へ行 紅一、黒坊の異見 紅一、馬鹿の釈名【馬鹿の訳名】紅一、生別死別 紅二、遊女 紅五、短命 弁上、くろん坊弁下、外科 弁下、君長を斜武といふ【君長を斜武といふ（轆而輹）】万一、王の子を立てざる話【王の子を立てず（応帝亜）】万一、婦人【知恵多き話婦人知多し（暹羅）】万二、イリンカットの人物【イリンカットの人物（渤泥）】万四、商人の呼声に鳴物を用ゆる話【商人（渤泥）】万四

4 地理 和蘭陀の開闢【阿蘭陀の開闢】紅一、人肉を喰ふ国 紅

一、都児格の都城【都児格の都】紅二、瓜哇の風土記【瓜哇の風土】紅二、和蘭陀より日本まで海路の記【紅毛国より日本国まで海路の記】紅三、紅夷国の名【紅毛国の名】紅三、日本の国名 紅三、和蘭国名 弁上、はるしやいんでん革 弁上、かぼちゃ 弁上、ほるとがる並図 弁上、おらんだじやがたら大略並世界略図【和蘭及咬囉吧大略並世界略】弁下、亜細亞洲の略説 万一、女国の事女国 亜媽撒撈 万一、天下の園圍【天下の園圍 応帝亜】万一、安日河の事【安日河（東応帝亜）】万一、南天竺の事【南印度ノ異 万一、天下を戒指に論ふる話【天下を戒指とす（巴爾齊亜）】万一、都児格人の図説【都児格人之図説】万一、莫臥爾人の図説【莫臥爾国】万一、如德亜の歴史【如德亜の歴史】万一、死海の説【死海 如德亜】万一、爪哇紀伝【爪哇紀伝】万三、巴旦人日本へ漂着の始末並巴旦人の図説【巴旦人日本へ漂着の始末】万三、呂宋の地を伊西巴亞に奪はれたる話【地を伊西巴亞に奪はる（呂宋）】万四、丁子並西国米の説【丁子並沙合米 馬路古】万四、文郎馬神の風土【文郎馬神の風土（渤泥）】万四、地中海の内羅得島の湊口銅人形図説銅巨人 羅得鳥 万附録、夜国の昼夜 紅一、摩利支天 紅五、入津の始並長崎旅館 弁下、江戸参向の由来及交易 弁下

5 習俗 法蘭得斯の正月【和蘭陀の正月】紅一、喝蘭人の葬式【紅

毛人の葬式】紅二、紅毛の喪服【紅毛喪服】紅二、黒坊の葬礼 紅二、木乃伊図説【木乃伊】紅二、切腹の事 紅二、男色の禁制【男色の制禁】紅二、蹴鞠 紅五、父母を喰ふ話【父母を喰ふ（轆而輹）】万一、葬送に人を殺す【葬送に人を殺す 得白得】

万一、占城国の婚姻【婚姻（占城）】万二、同国の葬礼【葬礼（占城）】万二、真蠟の雪隠【雪隠（真臘）】万二、同国の入澡洗の事【真臘人の澡洗（真臘）】万二、同国の送葬【送葬（真臘）】万二、熱油を探る話【熱油を探る】万二、姦夫の仕置【姦夫（真臘）】万二、牛を喰はざる事【牛を喰はず】万二、【華人真臘に逃る】万二、楊枝の事【楊枝（真臘）】万二、鳥葬の事【鳥葬（暹羅）】万二、同国の家作【家作（巴旦）】万三、人の血を浴る事【人の血を浴す 蘇門答刺】万四、男色を禁する説【男色を禁す（呂宋）】万四、死人の首を取換る事【死人の首を替（渤泥）】万四、同地婚の式【婚娶（渤泥）】万四、同地年中行事【年中行事（渤泥）】万四、喪に居る者歌舞する図説【喪に居る者歌舞す 台湾】万四、ぺんるふだ まんねんろふ あんじやべる 弁上

6 器物

胡鬼板並羽根の図【羽子板並羽根】紅一、蛮船の玉【石火矢】紅三、かんでら 弁上、ゑれきてる 弁下、かげ絵燈籠図【景画灯籠】弁下、殺活車 弁下、らんせいた べんどふさ 弁下、髑髏の台附鹿角の台【髑髏台附鹿角台（巴爾齊亜）】万一、護送車の図説附駝の説【護送軍附駝の説 亜刺皮亜】万一、聖鉄の話【聖鉄（暹羅）】万二、巴旦の甲冑【甲冑（巴旦）】万三、はあか並図 弁上、かるた 弁上、リユクトスキップ図説飛行の船【飛行の器】紅一、西洋紬並花布【海黄並花布の名】紅二、鉄鉋強図説【鉄鉋強】紅二、火浣布 紅三、ルプル図式【ルプル】紅三、顕微鏡附虫の図説【顕微鏡】紅三、仏狼機の名義【仏狼機】紅五、エレキテル図説【エレキテル図説】紅五、コンストホンテイ図式【コンストホンテイン】紅五、大船 紅五、硝

子並図 弁上、るうべる 弁上、写真鏡並図 弁下、升降水並図 弁下、煙草淡婆姑 紅一

7 施設 貧院 紅一、幼院 紅一、病院 紅一、紅毛人の給金 紅四、こんばんや 弁下、天獄の事【天獄（真臘）】万二、屋を車に駕る話【屋を車に駕す 轆而軛】万一

8 服飾 天鷲絨 紅二、ワトルハルナス水鎧 ワトルハルナス 紅五、紅毛図抄 紅附録、さらさ 弁上、おりもの 弁上、天竺の服飾【天竺の服飾（応帝亜）】万一、真臘の服飾【真臘の服飾（真臘）】万二

9 玉石 すらんがすてん 弁上、バサルの話附東方真珠【バサル附東方真珠 巴爾齊亜】万一

10 飲食 料理の献立 紅一、ぶだう酒 弁上、ばん 弁上、あるへいと かすていら 弁上、ばうとる 弁上、食料 弁下、馬肉をくらふ話【馬肉をくふ（轆而軛）】万一、生胆酒の事【生胆酒 占城】万二、酒を吸ふ話【酒を吸ふ（占城）】万二、焼酎作り様【火酒（渤泥）】万四

11 動物 竜の病薬水漬並喝臥国の風土記 紅一、北海の大魚 紅一、夜国の雁 紅一、緑色の鳩 紅一、鳳凰の説 紅二、弗尼思 紅二、鮪の価【このしろ】紅四、鰐の図説【カイマン】紅四、獅子の図説【レウ】紅四、駝鳥食火鶏並図 弁上、おくりかんきり並図 弁上、犀象と戦ふ【犀象と戦ふ】万四、鷹の王の事【鷹王 呂宋】万四、食火鶏の説【食火鶏 馬路古】万四、燕の説附黑坊役人を切害せし話【燕窩（渤泥）】万四

12 植物 あんじやべる 弁上、あめんどふす 弁上、こきんによ

弁上、はうてこぶら弁、あん産樹並図 弁上、てれめんていな弁上、根樹の説並図【根樹 東応帝重】万一、哀樹の説並図【哀樹（東応帝重）】万一、桂枝取やうの事【桂枝（錫蘭）】万四、毒の木の実の話【異菓 渤泥 万四、丁子並椰子酒の値【丁子並椰子酒の値（渤泥）】万四、飛竜頭 紅二

13 鉞物 かなのふる ぎやまん 弁上、へいさらばさら 弁上、カナノル図説【ブルトステン（応帝重）】万一

14 病薬 ポチの病症 紅二、疫癘の濫傷 紅四、ばるさむ 弁上、病薬びり、 弁上、みいら うにかふる へいしむれうる さふらん 弁上、ずぼふとふ 弁上、テリアカの説並功能【的里亜加（如德重）】万一、しゃぼん 弁上

15 話・譚 唐泊浦の孫七渤泥へ漂着の話【唐泊浦の孫七渤泥へ漂着の話】万四、日本人を見世物に仕たる事【日本人を見世物にす（渤泥）】万四、浜田兄弟知勇の事並図【浜田兄弟知勇の話】万四、玉石に化たる人の話【石人 納多理重】万一、海に橋を懸けたる話【跨海石梁（納多理重）】万一、頭蜜の説【戸頭蜜（占城）】万二、金塔の中に九頭の蛇精住む事【金塔の中の妖精 真臘】万二、寺に竈なき話【寺に竈なし（真臘）】万二、竹槍の会の事【竹槍会 瓜哇】万三、老人を殺す話【老者を殺す 巴旦】万三

不詳アンペラ 紅二

省略 陣毯の事【陣毯の事（真臘）】万二、同国の産婦【産婦（真臘）】万二、暹羅国の婚礼（暹羅）
以上、項目だけを分類配置した。一々について述べるゆとりは

ないが、一二あげればつぎのようなことも指摘できる。すなわち『紅毛雑話』巻之二「紅毛国の名」の記述は語学的な見地からみると注目に値する。

日本にて「ワランダ」といふは転音にて、実は「ホルランド」なり。支那にて紅毛、又紅夷など書るは、華人のくはしうせさる義訳なり。阿蘭陀と書は、少し転じたる音訳なり。紅毛の人、国の名を唱ゆるに、「ホラン」とのみいふやうに、ドの字を口チに残し云を聞て、蘭と書たる音訳も委しからず。近比、荷蘭、法蘭と音訳したるぞ親しかりき。

この記事は中良がネイティブの発音に通じていたことを明らかにする。アムステルダムを標準音とする蘭語の発音では、たとえば動詞の語尾音 *g* において著しく、最後尾の音を口に残すように明確に外側に発しないが、これと同様の現象がすでに江戸中期にあったことをこの中良の観察内容が語るからである。また「或曰「ヤパン」は唐音、日本の転声なるべしと也。」の記述がある。

B つぎに、『紅毛雑話』『万国新話』の情報の拠り所について確かめておきたい。はじめに『紅毛雑話』全項目の情報源を本文の記述から探る。以下調査の結果得られた情報の出どころについて記す。

〔人物〕

アウレントウキルレンハイト 「火浣布」紅三
宇田川玄随 右津山侯の医官、宇田川玄随子の訳せる、蜜書の説のあらましなり「ワートルハルナス」紅五

大槻玄沢 家兄の社友大槻玄沢子云「和蘭陀の正月」紅一、往

年玄沢子崎陽に遊学せし時、紅毛の卓袱を食せしとなり。其時の葉帖左に記す。「料理の献^{うづ}ン立」紅一、是等の転^{うつ}へるならんと玄沢子語られき「黒坊」紅一、今世に黒坊更紗、南京更紗と唱ふる物なりと玄沢子語られき「黒坊手拭」紅一、玄沢子云。彼黒坊の手水壺を……「黒坊の異見」紅一、「アールムースカス」の事玄沢子に聞けり「病院」紅一、以上の四説は玄沢子の物語なり「払尼思」都児格の都城「飛竜頭」「天鷲絨」紅二、玄沢子の物語にて聞しに「紅毛人葬式」紅二、忌服の日取は詳ならずと、玄沢子の物語なり「紅毛喪服」紅二、又玄沢子に聞たる黒坊の葬礼はいささかたがひたり「黒坊の葬式」紅二、玄沢子はいく、近來彼国の人「ポーチイ」といふ病を患ふ「ポーチーの病症」紅二、玄沢子曰く、アンペラは何国の語なるやさだかならず「アンペラ」紅二

尾張屋藤八 尾張屋藤八なる者の持たる蜃画に、此三院を画たるを見たり「病院」紅一

桂川甫周国瑞 猶くはしき事は、家兄翻訳の万国図説に載られたり。他日刊行の時をまつべし「龍の図説 並喝臥国の風土記」紅一、安永年間に來りし蜃人「フレーデレキ シキンデラル」といへる書記、伯氏に語りけるは（中略）すなはち家兄の需^{もた}に應して小文に作り、横文字に認めて送りぬ。今蔵^{くら}て文庫にあり。「北海の大魚」紅一、彼国にて「ホツト」といふとなん家兄語られけり「南無阿弥 並仏の名」紅一、打見の立派にて、内心愚なる人の仇名を蜃語にて「バアウ」といふ。（中

略）家兄申されき「馬鹿の積名」紅一、一昨年来りし「カビタン」^{名役}「ロンベルゲ」^名人^人印^{いん}帝^{てい}亜^あの海上にて難船の時、彼神火を見たるよしを語りしと、家兄の物語なり「海上の神火」紅一、先年東都にて、参向の加毘丹「アウレントウキルレンヘイト」長崎屋の旅亭にありて、仰出されを承りたる日より、黒色の喪服を着し、身体に飾を加へず、御初七日迄謹み居たり（中略）国瑞法眼まうされ侍る「紅毛喪服」紅二、家兄の考に曰「黒坊の葬式」紅二、家兄の物語に、（中略）火浣布の談におおよび鳩溪か送りこせたる石麻を出して、加比丹「アウレントウキルレンヘイト」に鑑定せしめたれば、此物上好の石麻なり「火浣布」紅三、ルスとリシとは同音なり。かたがたをあはせ見るに、伯氏の考必せり「摩利支天」紅五

朽木龍橋昌綱 龍橋世子の秘蔵したまふ新刻の蜃画を「飛行の器」紅一、是彼邦に瘟疫^{やびやう}を伝へしおこりなりと、植林重兵衛

が物語のよし。龍橋世子のたまひ侍り「疫癘の濫傷」紅四

司馬江漢 司馬江漢「ミコラスコーピユン」にて見たる所のものを、尽く画て家に蔵む。其一二図をもとめて左に出す「顕微鏡」紅三

トインベルゲ（チュンベリー） 往年「トインベルゲ」といふ蜃人、予が家兄のもとへ竜の子の薬水に浸したるを送る。「龍の図説 並喝臥国の風土記」紅一

中川淳庵 中川淳庵の考に曰。（中略）其全図等は翻訳和蘭藥選に委し。他日刊行の時をまつべし「鳳凰の説」紅二

植林重兵衛 左に写す画図は、訳官植林重兵衛が「テツチンギ」

よりゆづり授たる「シヨメール」といふ書に載る所なり「鉄
鉦強」紅二 是彼邦に瘟疫を伝へしおこりなりと、植林重兵
衛が物語のよし。龍橋世子のたまひ侍り「疫癘の濫傷」紅四
植林久三郎 足の裏にてすくひながら蹴上ケ、肘にても突き上
ケ、踵にてもはねあくると、植林久三郎語りき「蹴鞠」紅五
西何某 此条は崎陽の西何某なる人、(中略)の書中に載たる説
の荒増を語りたるを、席上に打聞たるままに、筆にまかせて
誌し置たるなり「靈鷲山の図説 附釈迦如来の伝」紅二、
「キユウレル」といへる蛮人、西何某に問て曰「切腹の事」

紅二

林子平 林子平子の^{三国通覧図説の作者}物語なり。「左右の手」紅一、林子平
が見たる加毘丹の葬式も、玄沢子の話と同じ「紅毛人葬式」
紅二、林子平崎陽尹に遊事して、西洋館に出ヲ入する頃、天
竺人の葬送を見る「黒坊の葬式」紅二

平賀源内 明和年間、東都の隠士、平賀鳩溪なる者、若州の侍医、
中川淳庵とはかりて、秩父山中より、産する石麻を以て、火
浣布を作りたれど「火浣布」紅三

鳳翔公子 近頃、鳳翔公子種々の「エレキテル」を新製したまふ
内「エレキテル」紅五

ロンベルゲ 一昨年来りし「カピタン」「ロンベルゲ」印帝亜を
海上にて難船の時、彼神火を見たるよしを語りしと、家兄の
物語なり「海上の神火」紅一、「ロンベルゲ」が、座右に置
きたる書籍の内に、「モミイ」の全形を画したるを見る「木
乃伊」紅二、「ロンベルゲ」聞て云、(中略)鯛の蛮名を「ハー

リンギ」といふ。「このしろ」紅四

佐々木与兵衛 近頃此鞠と紅毛羽子板の二種を、東都照降街に住
する、佐々木与兵衛なる者に教て作らしむ「蹴鞠」紅五

杉田玄白 杉田玄白子は頭顱骨を蔵す「木乃伊」紅二

田村藍水 此玩器吾家に珍藏する物。先年田村元雄先生へおく
る。今彼家にあり「ラケット之図」紅一

田村西湖 田村西湖先生の家に、此魚の小なる物の、薬水に浸し
たるを蔵す「カイマン」紅四

神学者流 また神学者流、摩利支天をさして、日前の神といふよ
し伝聞せり「摩利支天」紅五

長崎通詞 さらさといふは「スラタ」の転語なるべしと訳家の説
に聞り「海黄 並花布の名」紅二

蛮人 蛮人「爪哇の風土」紅二

〔書物等〕

蘭書

「アンドルアルツウエーレルド」予先年長崎屋源右衛門が許
にて^{阿蘭陀人の旅宿}大通詞吉雄幸作が蔵する「アンドルアルツウエー
レルド」といふ蛮書を見しに「龍の図説 並喝臥国の風土

記」紅一

ヨンストンス 動物図譜 家蔵の蛮書「ヨンストンス」といふ生
類図説の書中に載る所の図、此「ダラーカ」に似て二足あ
るものを出せり「龍の図説 並喝臥国の風土記」紅一、「弗
尼思」紅二、「カイマン」紅四

ウワールデンブーク 「ウワールデンブーク」「海上の神火」紅一、

ウヲールトブック 「ウヲールトブック」に、日に前立廻る星、

軍神なりと註せり「摩利支天」紅五

「シヨメール」左に写す画図は、訳官榊林重兵衛が「テツチン

ギ」よりゆづり授たる「シヨメール」といふ書に載る所なり

「鉄鉦弥」紅二、榊林九阜、重兵衛の号、家兄の紅毛字を好む事の厚に感じて是を属す。当時日本国中に只一部の書なり

「鉄鉦弥」紅二、鏤板之具 「シヨメール」に載る所の図式なり

り「紅毛の画法 附銅板の法」紅四

蜜書 蜜書の説に曰「木乃伊」紅二

紅毛談 先に家翁国訓法眼の友、後藤黎春が著す所の紅毛談に出

せる図「エレキテル」紅五

寄園寄所寄 寄園寄所寄に曰 鉦を名づけて仏狼機といふ事「仏

狼機」紅五

奇談万国図説 「奇談万国図説」「人肉を喰ふ国」紅一

釈迦如来八相物語 「阿羅々仙人 井天竺の額」紅四

典籍便覧 「火浣布」紅二

翻訳名義集 「釈迦の名 附仏の金色」紅三、「阿羅々仙人 井天

竺の額」紅四、「カイマン」紅四、「摩利支天」紅五

明儒の訳せる万国の図説 「仏狼機」紅五

彼邦の旧説 彼邦の旧説に云伝へたるよしなり「木乃伊」紅二

薬品会 その功のするとき事は去歲躋寿館にて薬品会の時、まの

あたり見たう人もあるべし「紅毛の画法 附銅板の法」紅四

また中良は絵図を描くのになくみであったが、本書には「ダ

ラーカ之図 中良自画」「鉄鉦弥 中良写」などがある。

以上、『紅毛雑話』執筆に際しての情報源を探求したが、個人からの情報という点からみると、圧倒的に大槻玄沢、桂川甫周国瑞であることがわかる。また、『蜜書』は基本的に蘭書を指す。ここに示された書物はドドネウスの植物書、ヨンストンスの動物書、シヨメールの百科全書、蘭語の辞典などがある。

C 「万国新話」の情報源

桂川甫周国瑞の著書

家兄の訳説・家兄の訳 「亜細亞洲の略説」万一、「屋を車に駕す

轡而靱」万一、「女国 亜媽撒擲」万一、「丁子 並沙合米 馬

路古」万四

家兄訳する所の「コウランドトルコ」「女国 亜媽撒擲」万一、

「護送軍 附駝の説 亜刺皮亜」万一

家兄の訳文 「天下の園囿 応帝亜」万一

家兄の考 「安日河（東応帝亜）」万一

家兄いへらく「髑髏台 附鹿角台（巴爾齊亜）」万一

伯氏の説 「バサル 附東方真珠 巴爾齊亜」万一

和蘭訳選 「ブルートステーン（応帝亜）」万一、「護送軍 附駝の

説 亜刺皮亜」万一

中良本人の著書

海外異聞 「老者を殺す 巴旦」万三、「唐泊浦孫七渤泥へ漂着の

話」万四、「喪に居る者歌舞す」万四

紅毛雑話 「服飾（応帝亜）」万一、「安日河（東応帝亜）」万一、「都

児格人之図説」万一、「婚姻（占城）」万二

西洋奇談（中良 現存不詳）「ブルートステーン」万一

西川如見の著書

華夷通商考 「真臘の服飾（真臘）」万二、「巴旦人日本へ漂着の始末」万三

長崎夜話 「巴旦人日本へ漂着の始末」万三

新井先生の采覧異言 「王の子を立てず（応帝垂）」万一、「髑髏台

附鹿角台（巴爾齊垂）」万一、「莫臥爾国」万一

桂山先生の説 「的里垂加（如德垂）」万一

前野良庵訳イヤーワンセヒストリー・爪哇紀伝（バターヒヤスケ

ノードシカツプ 爪哇要録 所収）「爪哇紀伝」万三

シヨメール 「的里垂加（如德垂）」万一

ドドニヨース 「根樹 東応帝垂」万一、「哀樹 東応帝垂」万一

ハレンティン（花運的印 西洋より東洋までの記行の蜜書なり・聖鉄の

項 筆者）「莫臥爾国男子之図」、「同女子之図」万一、「聖

鉄（暹羅）」万一

ヨハンブラア（ヨハンブラー）が地球図説 「君長を斜武といふ（韃

而韃）」万一、「根樹 東応帝垂」万一、「犀象と戦ふ」万四

万国人物の図 「根樹 東応帝垂」万一

蜜書 「石人 納多理垂」万一

蜜説 「死海 如德垂」万一

瀛涯勝覧 「戸頭蜜（占城）」万二

外国竹枝詞（昭代叢書）「服飾（応帝垂）」万一、「戸頭蜜（占城）」

万二、「酒を吸ふ（占城）」万二、「婦人知多し（暹羅）」万二、

「竹槍会 瓜哇」万三、「人の血を浴す 蘇門答刺」万四

真臘風土記 「生胆酒 占城」万二、「戸頭蜜（占城）」万二、「金

塔の中の妖精 真臘」万二、「真臘の服飾（真臘）」万二、「寺

に竈なし（真臘）」万二、「雪隠（真臘）」万二、「真臘人の澡

洗（真臘）」万二、「送葬（真臘）」万二、「天獄（真臘）」万二、

「熱油を探る」万二、「姦夫（真臘）」万二、「牛を喰はず」万二、

「華人真臘に逃る」万二

隋書「楊枝（真臘）」万二

星槎勝覧 「戸頭蜜（占城）」万二、「聖鉄（暹羅）」万二

東西洋考 「生胆酒 占城」万二、「婚姻（占城）」万二、「酒を吸

ふ（占城）」万二、「婦人知多し（暹羅）」万二、「鳥葬（暹羅）」

万二、「男色を禁ず（呂宋）」万四

方輿勝覧 「竹槍会 瓜哇」万三

本草綱目 「的里垂加（如德垂）」万一

明儒訳する所（明人）の万国図説 「王の子を立てず（応帝垂）」万

一、「哀樹 東応帝垂」「髑髏台 附鹿角台（巴爾齊垂）」万一

琅邪代醉 「戸頭蜜（占城）」万二

明儒の説 「莫臥爾国」万一、「石人 納多理垂」万一

明人の説 「君長を斜武といふ」万一、「父母を喰ふ（韃而韃）」万

一、「女国 亜媽撒撈」万一、「服飾（応帝垂）」万一、「根樹

東応帝垂」万一、「南印度ノ異」万一、「跨海石梁（納多理垂）」

万一、「如德垂の歴史」万一、「的里垂加（如德垂）」万一、「鷹

王 呂宋」万四

華人の説 「鷹王 呂宋」万四

書名のみ 「博物誌」「搜神記」

これらの記事のうち、「食火鶏（馬路亡）」の項に「客歲躋寿館にて藥品会の時、医官の田村氏、此鳥の死したるを公より給はりたるとて、其席に出されぬ」とあるが、この藥品会のことは『紅毛雜話』にも同日のこととして記述がある。中良がこれら二著を著す過程の環境がみえる。また本書の記述内容から、兄国瑞に関する情報が具体的に取り出せる。国瑞はかなりストイックだったのか、その実態がなかなか掴めないだけに、ここでの弟の証言は貴重な情報である。

五 『琉球談』『海外異聞』『惜字帖』

以下重要な著書である『琉球談』『海外異聞』『惜字帖』について、簡略に示し、取り急ぎ中良の海外認知、認識について書いておきたい。

『琉球談』は寛政二（二七九〇）年刊、中良三四歳のとき当時薩摩藩と清との両属環境にあつた琉球についてまとめている。

前野達蘭溪が書いた琉球談の序文のほか、今日の眼とはもとより異なる琉球に対する関心の高まりがみえる。この九月、版元の申椒堂主人（須原屋市兵衛）が書いた跋文は当時一般の関心事としての琉球をよく伝えている。以下全文を引く。

今歳寛政二年の冬琉球国王より慶賀の使臣□東の都に來り聘すると聞て四方の君子余か居舗に顧をたまひ中山伝真録琉球事略三国通覽などの書を購玉ふ毎に此等の書の外に琉球国の事実を童蒙の耳にも入易からむやうに記たる書のあらまほしさよ宜ふより利に走る足の逸く萬象亭にいたりて先生に請ふ

先生莞爾として笑て曰吾子か此挙あらむ事をあらかじめ推知して万国新話の遺稿より琉球の部を抄出し一編の小冊となしおけりとて取出して授け給ひぬ余手の舞足の踏をしらす頓に梓に鏤て世におほやけにす希は此書の為に都下の紙あたひの貴からじことを実に先生著述の書は余か家の揺錢樹なり

寛政二年九月 書林 申椒堂主人誌 印
『琉球談』を書くとき中良は「中山世鑑録、隋書、宋書、神代紀、中山伝信録」などを参照し、学びながら書いた。

つぎに『海外異聞』について述べる。披見した穂久邇文庫所蔵『海外異聞』は中良自筆の一本として注目される。本書は寛政元年までに収集した海外情報の内容にもち、具体的な現われとしては「天竺徳兵衛物語」をはじめとする帰国した漂流者の記録集となっている。その意味では学術的な内容をもつ大切な記録であり、兄甫周とともに形成した一本である。ここには中良の書いた序跋二つを記すだけにとどめる。はじめに「首巻」にある序文はつぎのように書かれている

序 いでや行も通はぬ異国の土風を其人に聞ずして耳に親しく踏も渡らぬ山川をみたからたとらずして目に見るか如くならしむるものは。彼西海の艾儒略か職方外記龍溪の張翮が東西洋 考等の諸書をおきては。大海原に舵楫を失ひて外国へ吹漂はされたる。船人等が物語に及もの有じと。奚の秘冊彼跡の蔵書をあなぐり需め獲かまにまに書集れは。はからず一帙の書となりぬ木胤はしたなう吹進む秋の夜ころ。鍾礼の雨の窓を打める冬の日に。独読独玩は。一時の奇快以て人に語か

たし。実に陳留杭が未曾で見ざる書を読よ。未かつて至らざる山水を歴あは至宝を獲あ。異味みを嘗なむか如しと云けるも味ひあるかな。

桂林舎

寛政改元首夏 萬象亭主人述中良書（書き印）

跋 予此書を編輯するころ一日吉田漢宮訪ひ来り。机辺の草稿を見て云。漂流の記聞世に少からすといへとも、此編の如く巻帙供大なるは未曾で見ず。実に異聞を広むる一大奇書なりと称嘆する事数回。事の序に語つて曰。此頃或人の説に、去天明二年の冬勢州白子の船頭大黒屋光太夫なる者合船十七人颶風（アトカ）に遇て願（アトカ）迹を失へりと聞り。若他邦へ漂着し聞有て帰国せば必此編の中に入へしと戲しか。其後寛政四年の秋羅文国の船、彼漢官が語りたる勢州の漂民を護送して東蝦夷地ネムロに来る。十七名の中生て還る者光太夫磯吉小市の三人のみ（小市はネムロ口にて死す）頓（ヤカ）て漂民を東都に召れ吹上に於て□上覧有り（家兄甫周此日の草記（有り吹揚朝記といふ記））其後家兄□内命を奉して雉子橋御廐の寓居に到り漂民等に訊問し、国制はいふにや及ぶ。彼俗問の瑣事に至るまで輯録し書十二卷（北條閑略）図二卷を作りて官へ奉らる。不日に有司より令有て其書の草稿零碎の紙片まで尽く官へ収められ、実に瑯嬛の秘書に等しく人間見る事を得ざる書と成ぬ。予頻其挙に預り漂民とは殊に親しく種々の奇説を聞たる故、記して此書の榮とせん思ひしか、彼国の事は漫りに伝ゆましき旨□官よりおそかに書きて給へは止事を得ずして掃やみぬ。麟を獲て春秋の筆をと、め給へるいにしへ

にならふもおふけなけれど、我も光太夫を獲て此書の巻を結ぶ。後來漂流の異聞あらば後の君子記し給へといふことしか

寛政甲寅の冬桂林舎の窓下に筆を採る

桂川甫榮中良

序跋は一読して明瞭なように、桂川家に起居する中良以外には残せなかつた内容をもっている。兄甫周国瑞はきわめてストイックで、余計なものを残していない。そのため、語学力も、たとえば『魯西亜志』などの翻訳文体が静かにその力を語ってくるだけである。しかしその訳自体は今日にその正確さを伝えている。

中良は巻十九の「小引」に兄についてこのように書いた。

此書某氏の編輯なるを知ず。客歳亡兄月池君戸田氏より借得て予に授らる。即筆耕に命じて謄写せしめ、海外異聞の別集とするも、実に亡兄の賜なり、惜むらくは撰者の名を伝へず。同好の感、狐兔の悲しみ無にしもあらず。

文化己巳仲秋二日書于桂林舎西軒 桂甫山中良

これは中良、国瑞兩人の研究にとつて重要な記事である。文化六年甫周国瑞が没した時を確実に知らせている。

おわりに『惜字帖』について記す。『惜字帖』は今泉源吉氏がその著で世に知らしめてから半世紀に近い。今泉氏は現代において中良の生没年確定に至る重要な指摘をした。さらに、この資料は晩年に中良が示した海彼への興味を物証として示したことで貴重である。ここには「ランウタン図並賛」をはじめ、清と西洋の文物、布、葉などをめぐる広告類他をコレクションしている。

その意味で今後の桂川家、中良、国瑞研究の資料として注目される一本である

むすび

以上、ここでは中良の眼が確認した東西文化の具体的事実を明らかにしようとした。しかし、具体的な内容についていっそう深く及ぶにはまた別稿を用意しなければならない。

文献

今泉源吉（一九六八）『蘭学の家 桂川の人々 続編』篠崎書林

岡田袈裟男（一九九二）「幕末の文学」（『日本文学史を読む 近世』所収）有精堂

岡田袈裟男（一九九二）「森島中良の見た異文化簡見 穂久瀬文庫蔵『海外異聞』にふれながら」学録

岡田袈裟男（二〇〇二）「江戸知識人と『琉球』のことは 森島中良「琉球談」小野蘭山「本草綱目啓蒙」などをてがかりに」特集 沖縄返還三〇周年 国文学解釈と鑑賞

小野忠重（一九四三）『紅毛雑話』双林社

杉本つとむ（一九七二）『紅毛雑話・蘭説弁惑』八坂書房

杉本つとむ（一九八二）『江戸蘭語学の成立とその展開Ⅳ 蘭語研究における人的要素に関する研究』早稲田大学出版部

新刊紹介

野村敏夫著

『国語政策の戦後史』

「国語政策」と言われても、あまりピンと来ないかもしれない。だが人名漢字の追加や「ら抜き言葉」の問題等は、身近な話題として、関心を持つ方も多いであろう。本書はそういった国語政策に属する施策の

体系や歴史を記述したものである。本書は単なる個々の施策の解説や、政策批判に止まる従来の解説書とは異なり、国語政策を時代の大きな流れの中に位置付けることを試みている。

各章では、戦後の国語政策立案の中枢を担ってきた国語審議会における議論の内容とともに、それに対する民間における論争や政党内の動きも取り上げられており、各々の政策の時代背景をも把握できる。終

章では、それらの国語政策の展開が時代の流れとともに巨視的にまとめられており、それらがどのように位置付けられ、意味付けられるかが理解できる。

このような時代の状況と国語政策を結び付けた記述は、御自身も文化庁国語調査官として、実際に国語政策に携わったことのある著者ならではのものである。二〇〇六年十一月 大修館書店 四六判 三三二頁 税込二五二〇円）〔錢谷真人〕